

## アルタイ山中にクルガンを訪ねて

和田晴吾

### はじめに

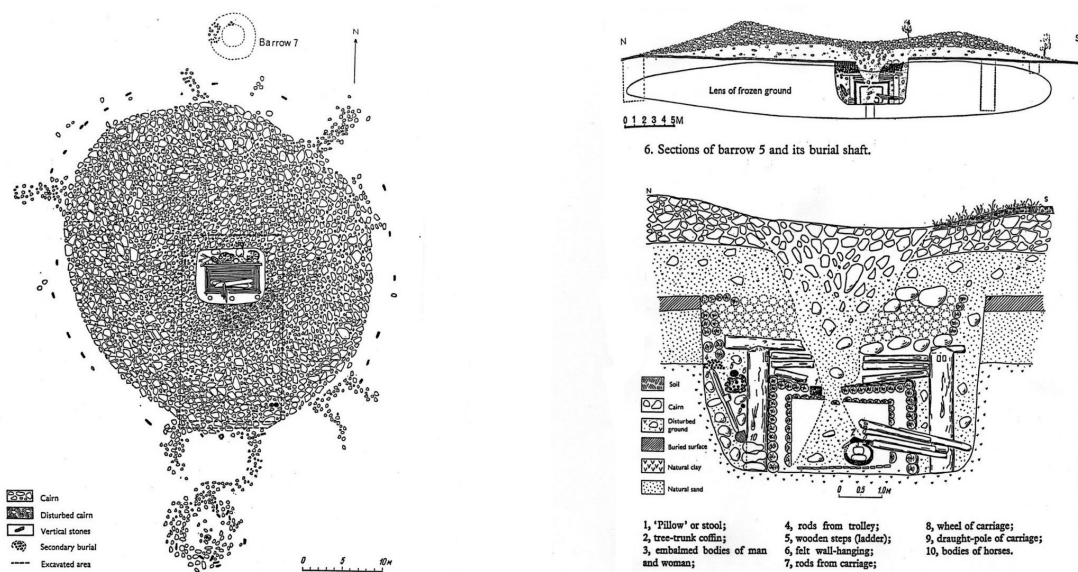
アルタイは行くこと自体が刺激的で鮮烈な印象を与えてくれた。

今から30年余り前の1991年（平成3）7月26日～8月16日にかけて、私はソビエト連邦科学アカデミー・シベリア支部・考古学民族学研究所（所長：A.P.デレヴィヤンコ所属・役職はいずれも当時）が主催し、日本の北方ユーラシア学会（会長：江上波夫・古代オリエント博物館館長、代表理事：加藤晋平・千葉大学教授）とパジリク王墓発掘日本委員会（委員長：田中 琢・奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）が協力するパジリク王墓日ソ合同発掘調査に参加した。日本側は保存科学の研究者が中心で、参加を希望する考古学研究者は自費参加だった。4班編成で、私は第2班。加藤 修（東京女子美術大学）、川又正智（国士舘大学）、内田俊秀（京都芸術短期大学）、中川正人（滋賀県文化財保護協会）、雪嶋宏一（早稲田大学）、橋本功司（フリーカメラマン）の6人とおもに行動をともした。考古学研究者の参加は13人。石野博信名誉館長は第3班だった。前年に予備調査が行われていて、本年は本調査にあたった。

目的は、アルタイ地方のスキタイ系遊牧騎馬民族の歴史と文化を、ソ連と各国（日本、アメリカ、韓国、イギリス・ベルギーなど）が共同で研究することにあつた。

表題のクルガンとは、ユーラシア大陸中緯度の、東はアルタイ地方から西はコーカサス、ルーマニアにかけて広がるステップ帯に分布する、青銅器時代の積石塚（時に土が混じる）のことである。

パジリク・クルガン群もその一つで、「パジリク」は、アルタイ山脈北部にあたるオビ川上流のパジリク川河畔に営まれた大型円形クルガン5基と小型円形クルガン9基からなる積石塚群をさすとともに、それらを生みだした文化の名称ともなっている。



第1図 パジリク5号クルガンの墳丘と埋葬施設

研究史上、特にこのクルガン群を有名にしたのは、1929・47～49年に行われたM.P.グリヤズノフとS.I.ルデンコの発掘調査によるものだった。墳丘は直径20～40m代。埋葬施設はカラマツの丸太を組んだ木槨で、内部に同じ材からなる刳抜式木棺（長さ約3～5m）があり、ミイラにされた遺体は原則として男女合葬、東枕で納められていた。冷涼な気候やクルガンの構造から、木槨は永久凍土に包まれ、埋葬された人（時に黒色の刺青をもつ）や殉葬された多数の馬の遺体はじめ、フェルト、織物、皮革、木製品（馬車を含む）などの有機物が良好残っていた。そのなかにはエジプト、ペルシャ、インド、中国など広範な世界との交流を示すものもあった。特に最大の5号クルガン（約42m、第1図）出土の王権神授の場面を描いたフェルトの壁掛けが名高い。パジリク文化の年代は一般的には前6～前3世紀とされているが、このクルガン群は放射性炭素年代測定により前3世紀前半頃と考えられている。

アルタイ地方の永久凍土に護られた王墓の埋葬施設とその内蔵物は、日本の保存科学の力量を示す恰好の対象だったのだろう。空調の効いたドームの中で発掘をする予定との話も伝わってきていた。

ただ、調査対象地は、アルタイ山麓における民族主義的高揚を背景とした治安の不安定さなどを理由に、調査直前に変更され、場所は山奥の高所に移されたようで、計画通りには行かなかった面もあったらしい。

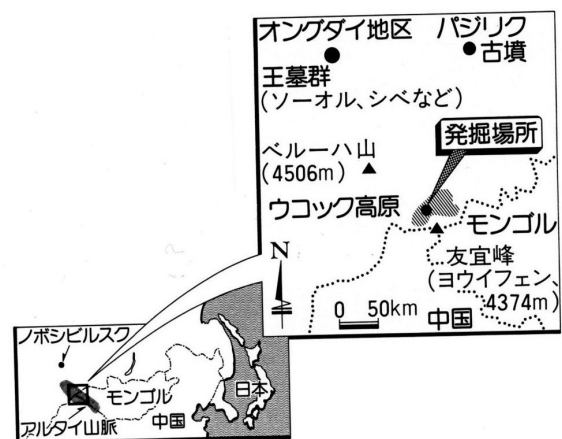
## 1 いざ、アルタイ山中へ

7月26日、空路、新潟経由でソ連のハバロフスクに入り、27日にはイルクーツクを経てオビ川中流河畔にあるノボシビルスクへ。考古学民族学研究所を訪ねて挨拶。翌28日は、早朝にオビ川を堰きとめた人造湖で裸ぎがわりのひと泳ぎを済ませ、早速、22人乗りの大型ヘリコプターで出発した。目的地のアルタイ山中にあるウコック高原のキャンプ地までは南南東へ直線で約600km（第2図）。広大なシベリアの耕作地やタイガの森の上空を一気に突っきて進むと、はるか彼方に氷雪を頂くアルタイの山並みが見えてきた。途中、ゴルノ・アルタイスクで給油と昼食。山地にはいとカラマツの林に覆われた急峻な斜面に幾筋もの溪谷が走り、時々、幅狭な河岸段丘上に遊牧民の越冬小屋が見えた。

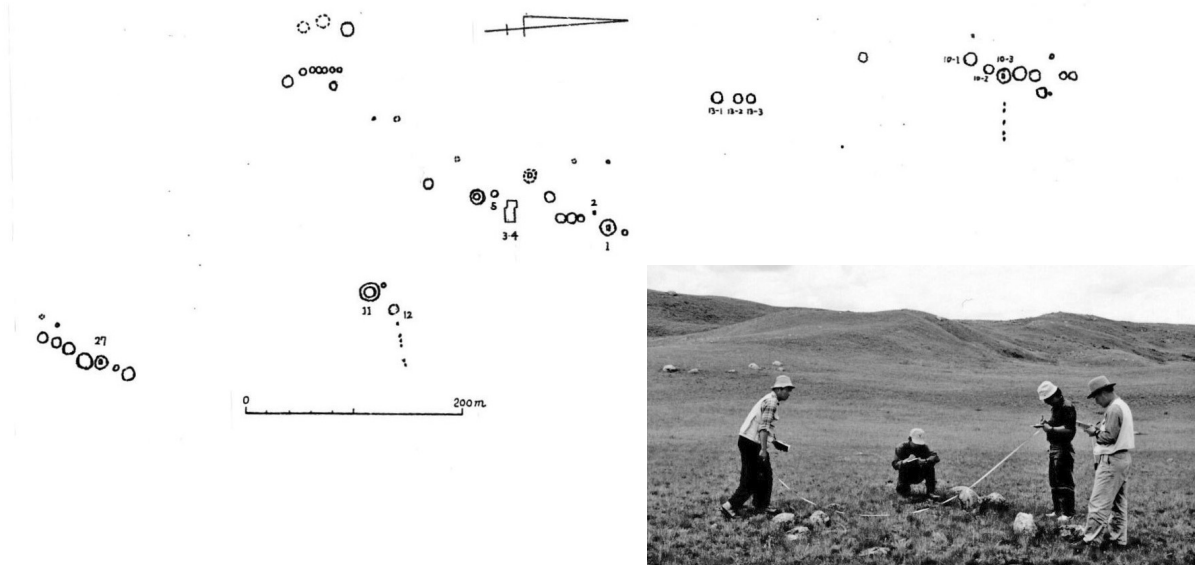
出発から約5時間半。夕刻にはウコック高原ベルテック（天頂）溪谷の第1キャンプに着陸した。

ここはオビ川最上流のアクアラハ川とカルグトイ川の合流点にできた盆地状の高原で、南側には標高4374mの友誼峰（フィティン山）を中心とした山塊が横たわり国境線をなしている。南東のモンゴル国境まで約30km、南西の中国国境まで約25km。その向こうはカザフスタン。まさにユーラシア大陸のど真ん中だ。

高原の北西隅にあるキャンプは、白濁した雪解け水が豊かに流れるアクアラハ川左岸の低い段丘上に設営されていた。川に沿った上流側のテント群にソ連の人たち（学生を含め総勢50人以上）。日本人などは下流側の木造仮設小屋群。両者の間の川辺にサウナ小屋、下流の少し離れたところに板囲い土坑のトイレがあった。標高は約2200m。森林限界線を越えた高地で、一帯はエーデルワイスの仲間や、ホソバリンドウのような紫の花を咲かせた背丈の低い植物からなる草原であった。短い夏の昼間は最高温度



第2図 発掘場所



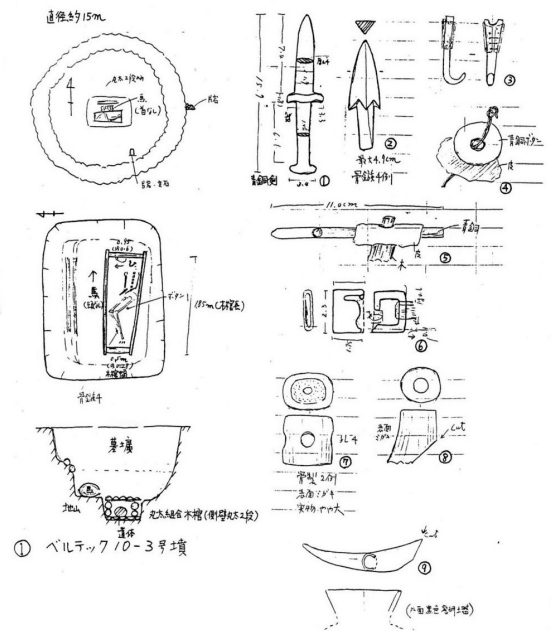
第3図 ベルテック・クルガン群分布略測図と調査風景

が30℃を超えるが、夜は氷点下まで下がる厳しい気候。調査期間は3ヶ月ほどに限られるという。私たちはここを拠点に7月28日～8月7日まで10日ほどを過ごした。夏のため日暮れは遅く午後10時頃。夜は冷えるものの満天の星空に白い雲のように天の川がくっきりと見え、北に北斗七星と北極星、中天に夏の大三角形、南にサソリ座が横たわっていた。ゆったりとした時間が流れた。

## 2 ベルテック・クルガン群

第1キャンプの段丘上には、前3千年紀後半～前2千年紀初頭頃のアファナシェヴォ文化、前6～前3世紀頃のバジリク文化、6世紀前後のチュルク（突厥）文化（柔然～5、6世紀～に隷属中に鉄工奴隸としてアルタイ山脈南麓に移住したという）、19世紀前後のカザフ文化など各時期の墳墓を中心とした遺跡が分布していた。

私たちは遺跡を直接発掘できなかったため、一日中現場を見てまわるしかなかった。そこで、加藤、川又、雪嶋、和田らがビニールテープやコンバックスなどを使って作成したのがバジリク文化のクルガン群を中心とした遺跡の分布略測図（第3図）である。クルガンは直径5～15m、高さ1mほど（木槨の腐朽により中央窪む）の小型円形のもの3～8基ほどの支群を形成しつつ、南北に並んで分布していた。その数40基あまり（図中にはカラスク文化～前15世紀～前8世紀～のストーン・サークルやチュルクの方形石囲い墓なども含む）。バジリク文化のクルガンには直径が70m近いものや40m余りのものもあるから、これらはさしずめ日本の群集墳に相当するのかもしれない。ベルテック10-3号クル



第4図 ベルテック10-3号クルガン

ガンや12号クルガンの東側には柱状の立石5、6本が東西に並ぶ石列が認められた。また、西側には祭祀跡と考えられている、数個の丸石からなる環状列石も見られたが、墓との対応関係は明確ではなかった。クルガンが南北に並ぶのは、東西に付属施設があるためなのだろう。

第4図は今回発掘されたベルテックのクルガンのうちで、もっとも内容がわかった10-3号クルガンの略図である。墳丘は円形で直径約15m。他に目立つものとしては、高さ1mにも満たない柱状の立石が、墳丘南東の外縁列石（積石の基底石）の内側に1本、墳丘真東の外縁列石の東側に接して1本、その東に5本が並んでいた。しかも、クルガンを構成する石がいずれも人頭大ほどの丸みのある川原石なのに対し、これらは片岩系統の緑っぽい割石であることが注目された。すでに発掘が終わっていた1号クルガン（約15m、東西墓坑）も、ほぼ同規模・同径式のものであったが、墳丘東南の外縁列石内側に1本の立石（片岩系の石）があり、真東の外縁列石上には直径30cmほどの丸いすり臼1対が置かれていた（その東側には石列は認められなかった）。

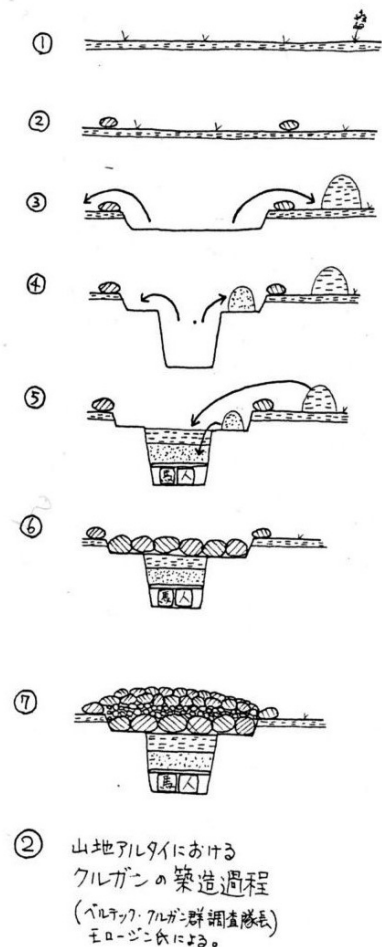
埋葬施設は、墳丘下の地山に穿たれた東西に長い隅丸長方形の墓坑（深さ約1.5m）に、丸太を2段ほど積みあげた組合式木棺を安置したものだ。内部に1人が東枕で、身を少し北向きに振り、膝をかるく曲げた状態で納められ、棺外の北側にはやはり東枕で馬1頭（頭骨がないとのこと）が殉葬されていた。さらに、その北側の比較的高い位置にも丸太材の痕跡が見られたことからすると、棺と馬を覆う蓋状の構造物があった可能性が高い。このクルガンの墓制は、東西、特に東を強く意識したものと言うことができる。

副葬品として見たものは、青銅製の短剣1（鞘つき）・ピッケル状の鬮斧1（ミニチュアという）・鈎状品1・ボタン1・帯金具1、骨角製の鏃4・刀子柄（？）1・有孔不明品1（鳴鏑か）、土器片などであった。

全体に発掘が少々粗そうだったので、ベルテックの調査隊長であるV.モローディンさんにクルガンの築造過程を聞いてみたところ、即座に答えが返ってきた（第5図、作図・和田）。

①墓域を選び、地表面にクルガンの外縁列石を円形に配し、③その内部の表土を取りのぞき、④中央に地山掘りこみの墓坑を東西方向に穿ち、⑤人と馬を納め、⑥地山掘りあげ土、表土の順に埋めもどし、⑦最後に積石を大きな石、小さな石、中ぐらいの石の順に積んで終了するという。確かにソ連の発掘手順はこの解釈に則ったものだった。押さえるべき点はきちっと押さえられていた。後は、器財が不十分で調査期間も短かく限られるなか、少しでも多くの成果をあげるために考えだされた方法なのだろう。

パジリク文化のクルガンは、墓域の選定、空間認識、築造手順、墳形、棺・槨・壙、人・馬・副葬品の埋納など、どれをとっても強い集団的規制が働いているようにみえた。これが何よりも強い印象だった。同様のことは18世紀末～20世紀初頭に営まれたというカザフ人のイスラム墓地でも感じた。この他、ベル



第5図 クルガンの築造過程

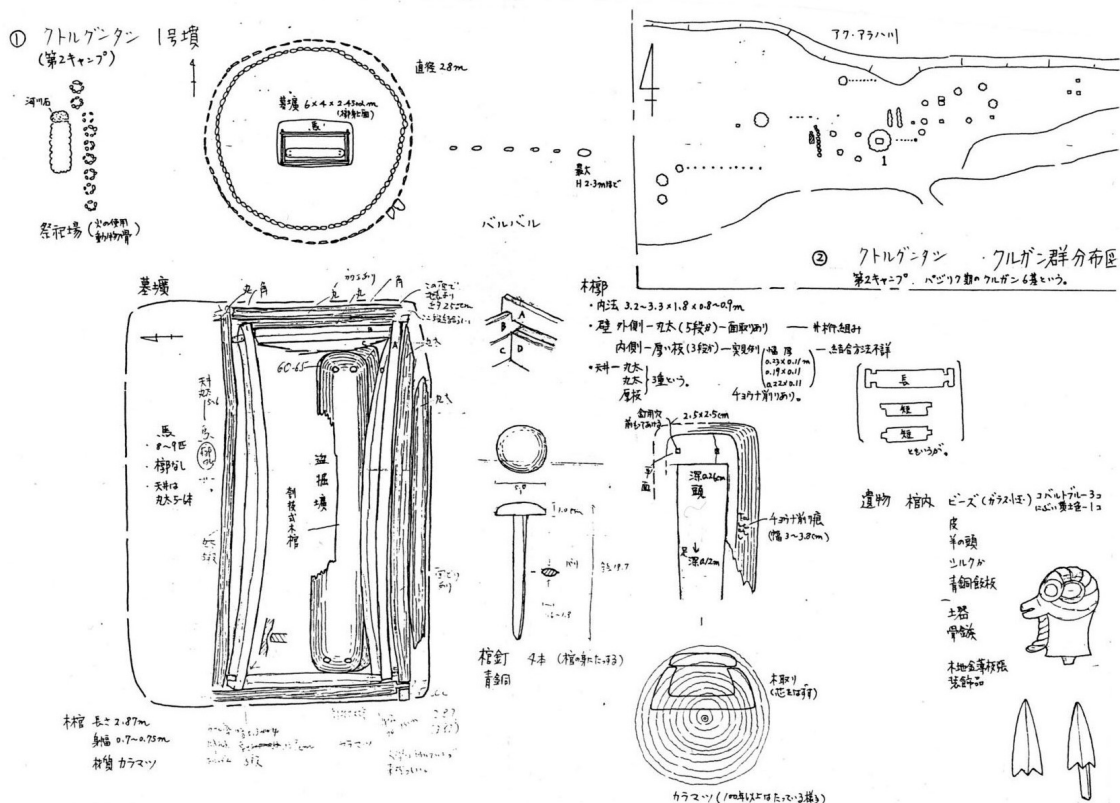
テックでは少なくともパジリク文化のクルガン3基（1・12・27号墳）と、アフアナシェヴォ文化の小型の積石塚（直径4～6m）2基、チュルクの方形石囲い墓1基などが発掘された。アフアナシェヴォ文化の埋葬施設は土坑（1基は土坑の壁に板石を立てていた）で、遺体は西枕に納められ、頭の近くに土器が1個置かれていた。隕石のようなものを象嵌した石棒を副葬したものもあった。クルガンの源流は新石器時代にまで遡るのだろう。

### 3 クルトウンゲンタス1号クルガン

第2キャンプは、第1キャンプの下流約10kmにあるクルトウンゲンタス・クルガン群の中にあり、時々、トラックや徒歩で見学に出かけた。アクアラハ川の屈曲部左岸の低い段丘上に営まれた10数基の円形クルガンからなる群で、最大の1号クルガンが発掘されていた（第6図）。

墳丘は直径約28m。墳丘の外側には緑色の片岩系の板石を立てた列石がめぐり、その東側には同じ石材の高さ2、3mほどもある柱状の立石を含む列石があった、また、西側の少し離れた所には直径約2mほどの小型の環状列石9基や長方形の石敷きからなる祭祀跡かと推定されている遺構（焼けた獣骨などが出土）が伴っていた。いずれもベルテック・クルガン群よりは規模の大きいものだった。

積石を取りのぞいた地山面の中央には、東西に長い隅丸長方形の大きな深い墓坑（深さ約3m）が穿たれ、内部には、内側に角材、外側に丸太を用いた2重の木槨が築かれ、長さ約3mほどの刳抜式木棺1基が納められていた。木材はいずれもカラマツ製で、刳抜式木棺は巨木の芯をさけた木取りで、蓋の断面は蒲鋒形、身の底部は平底。表面にはチョウナ痕が生々しく残っていた。特に、木棺の蓋の両端に



第6図 クルトウンゲンタス1号クルガン



第7図 氷雪のベルーハ山

それぞれ長さ約20cmほどの青銅製釘が2本ずつ打たれていて、目のように見えるのが印象的だった。蓋を開けるとこの釘は棺の身にまで深く貫通していて、蓋が開かないようにする仕掛けでもあった。パジリクの刳抜式木棺は「槨」に相応しい「閉ざされた棺」だった。なお、この棺を「ナマズ形木棺」と呼ぶ人もいた。ナマズは長寿を意味するらしいが、棺に表現されているとなると、ナマズは死者の魂の行方と深く係わっていたのかもしれない。昨年の予備調査でアクアラハ1号墳（円形、約18m、1重木槨、

刳抜式木棺2基、馬5頭、馬具など出土）から出土した遺物の中にフェルト製の大きなナマズ形馬具飾りがあったのも興味深い。

いずれにしても、木材が残ったままの完形に近い木槨や刳抜式木棺を見たのはこれが初めてで感激した。ただ、永久凍土の中に保存された未盗掘のものであることが期待されたクルガンだったが、実際は盗掘を受け、木棺の北側は大きく抉られていたし、木槨天井の木材は黒く焼けこげていた。発掘中、申しわけ程度に氷の塊が出土した。

なお、ベルテック滞在中の8月5日。快晴の午後に大型ヘリコプターで、氷河を頂くベルーハ山（標高4,506m、第7図）の横を通り遺跡見学に出かけた。ただ、パジリク・クルガン群などに滞在できたのは10分ほど。8月9日にもデニソワからの遺跡見学でシベという大型クルガン群に立ち寄れたが、ともにクルガン群の立地や雰囲気を感じただけに終わった。しかし、それでも見たかいがあった。途中で降りた緑豊かな谷間のカラマツの林や、青紫のきれいな花を咲かせたトリカブトの群落、御幣の紙垂のような白い布を垂らし現在も遊牧民の信仰の対象となっている湧水なども印象に残った。

#### 4 パジリク文化における墓制の共通性と階層性

今回、ベルテック・クルガン群とクルトゥングentas 1号クルガンの発掘などを見学できたことで、パジリク文化における墓制の強い共通性と階層差に触れることができたことは大きな収穫であった。現地での知見を中心に、諸要素を簡単にまとめると、多少時期差はあるが、以下のように整理できる。

70m級－トゥエクタ1－68m－墓坑・2重木槨・刳抜式木棺1－男1－北側に馬8

60m級－バシャダル2－58m－墓坑・木槨・（刳抜式）木棺2－男女一対－北側に馬14

50m級－シベの1基－45m－墓坑・2重木槨－刳抜式木棺1－男と幼児－北側に馬14

40m級－パジリク5－42m－墓坑・2重木槨・刳抜式木棺1－男女一対－北側に馬9

バシャダル1－40m－墓坑・木槨・刳抜式木棺1－男1－北側に馬10

30m級－トゥエクタ2－32m－墓坑・木槨・刳抜式木棺1－女1－北側に馬8

クトウルグentas 1－28m－墓坑・2重木槨・刳抜式木棺1－北側に馬

20m級－アクアラハ1－18m－墓坑・木槨－刳抜式木棺2－（北側に）馬5

15m級－ベルテック10－3－墓坑・（木蓋）－組合式木棺1－北側に馬1

10m～5、6mまであり

いずれも円形の積石塚で、墳丘下の地山に東西に長い墓坑を掘り、木槨（時に2重）を築き、刳抜式木棺を納めている（[有光ほか編1979]ほか）。パジリクでは男女一対が基本とされているが、そうでない場合もあるようだ。人の遺体は東枕で、木槨の北側に馬を殉葬している。以上の要素は直径20m以上のクルガンでは基本的に共通している。ただし、直径が15mのベルテック10-3号クルガンでは、槨は木蓋風のもので、棺は丸太組合式木棺となるなど、顕著な階層差が現れる。

パジリク文化のクルガンの墳丘は、知見では、最大でトゥクエクタ1号クルガンの直径68m、高さ4.1mで、最小は5、6m程度である。相対的に、墳丘が大きいほど墓坑は大きく深くなり（トゥクエクタ1号クルガンの墓坑は7.10×7.40m、深さ約7.5m）、木槨は2重で大きくなる（同外槨4.98×5.91m・高さ約2.3m、内槨4.15×4.90m・高さ約1.8m）。相対的だが殉葬の馬の数も増える。

林 俊雄によると、前1000年前後にモンゴル高原には階層社会が形成され王墓が出現する。しかし、初期のもの（ヘルクスル）では馬の骨以外、ほとんど何も遺物が出土せず、馬具や武器、装飾品が多数出土する「古墳」の出現は少し遅れるという（[林2014]、以下同様）。

それでも、ソ連トゥバ共和国では、すでに先スキタイ時代（前9～8世紀）ないし初期スキタイ時代（前7世紀）には墳丘規模が約110mの円形クルガンで多数の殉葬者、殉葬馬、副葬品をもつアルジャン1号クルガンのような「古墳」が出現してきている（14c年代では前9～前8世紀）。同2号クルガンも約80mで前7世紀頃と推定されている。

これらに匹敵するような直径が100m前後に達する大型クルガンは、カザフスタン南部のバスシャトゥル大クルガン（104m 高さ推定20m）、カザフスタン東部のシリクトゥ・クルガン群中央グループ（約100mのもの13基を含む）、ソ連ハカシア共和国のサルブククルガン群中の1基（方墳-稀、125m、高さ推定25～30m）などが各地に散在しており、カザフスタン北部のクルク・オバ・クルガン群には直径約160m、高さ約22mのものもあるという。

いずれも「木槨」構築後に墳丘（積石）を造るという（墳丘後行型）、日本の古墳（墳丘先行型）とは異なる築造手順をとる。しかし、「木槨」には地上に造られたものと、地山に墓坑を掘ってその中に造られたものがあり、前者の方が時期的に先行するという。また、「木槨」には入口がないもの（本来の木槨）と、入口があるもの（木室）とがあるとの指摘もある。クルガン周辺の石囲やストーン・サークル、立石などの外部施設のあり方も多様とのこと。それら諸要素の組合せが地域差、時期差、階層差をもってどのように整理でき、社会の構造や民族などどのように対応するのか、興味は尽きない。

木槨そのものの構造や、埋葬施設全体の構築手順などは、韓国の新羅の積石木槨墳（4～6世紀）や伽耶の大成同古墳群などの木槨墳（4世紀中心）、ひいては日本の木槨の系譜を考える上でも参考になる。

## おわりに

8月7日午後、大型ヘリコプターでベルテックを離れウコック高原北側のデニソワ溪谷に移動した。ここには人骨（デニソワ人）の出土で有名なデニソワ洞窟をはじめとする旧石器時代を中心とした遺跡群があり、長期的な発掘調査を継続するための拠点施設があった。

私たちはここでデニソワ洞窟、シュトラシナヤ洞窟、カラボン遺跡、カミンナヤ岩陰、ラズボイニチャ洞窟などの遺跡を見学し、施設に保管されていた石器類などを観察しつつ、バレーするなどしてソ連関係者との親睦をはかった（テレビヤンコさんは若い頃はバレーの選手だったという）。そして8月13日、

ノボシビルスクにもどり、14日、研究所へ帰国の挨拶に行き、ハバロフスク経由で、16日に帰国した。

私たちの旅は極めて順調に終わった。望みもできない調査旅行を体験させていただいた関係者に心からお礼を申しあげたい。しかし、驚いたのは、帰国間もない8月19日にソ連のゴルバチョフ大統領が拉致されるというクーデターが起こったことである。それはソ連崩壊の始まりだった。ただ、その時、石野名誉館長はまだアルタイの山中におられ、下山のためのヘリコプターがなかなか来ないといったハプニングがあったという。予想もできなかった出来事だったが、先生はいつものように泰然自若としておられたのだろうか。

若い頃から先生のお名前とご業績は良く知っていたが、お話を直接伺う機会はほとんどなかった。古墳の発掘現場などではできるだけ多く見に行くよう努めてきたが、しばしば、「もう石野先生が来られていましたよ」という話を聞かされた。後でお話を伺うと、先生の現場主義は日本だけではなく世界に広がっていた。

1995年（平成7）、47歳の時に兵庫県文化財保護審議会委員になった時から親しくお話しする機会ができた。その頃は、審議会の後には関係者を呼んでの打ち合わせ会があったし、但馬など遠方に指定物件がある場合などは1泊2日の視察もあった。そんな折は、先生より1歳年上のもう1人の委員である間壁葎子先生（当時は神戸女子大学）と先生の絶妙の、しかもほとんど絶え間のない会話が有益でおもしろく、みんなを喜ばせ、一体感を生みだした。

それだけに、2015年、先生の後任として兵庫県立考古博物館の館長としてお呼びいただけたことは大変な光栄であり深く感謝している。就任初日、館長室にはいると机の上にマジックで何か書かれた1枚の紙が置いてあった。

「Welcome 晴、そして吾！2015. 4. 1 兵考博・一同」

嬉しかったので、今もリュックに入れて持ち歩いている。名誉館長として来られた折は、同じ奈良方面へ帰るので、鶴橋で途中下車したこともたびたび。お話の中で、先生の義理堅さや包容力、胆力を感じた。博物館で人気と人望があるはずだ。

そんな先生が、昨年暮れ、事故に遭われた。直後は両手両足ともに動かなくなっていたが、驚異的なスピードで回復に向かわれている。先生の、いつもと少しも変わらない、くじけない心、前に進もうとする心がそれを可能としているのだろう。まさにラグビー・フォワードNo.1。1日も速いご回復をお祈り申しあげるとともに、今後も末永くご指導いただけますようお願い申しあげます。

#### 【挿図出典】

第1図 Rudenko1970, P15, 図3・P20, 図6 第2図 北方1991, P2 第3～7図和田スケッチ・写真

#### 【参考文献】

有光教一ほか編 1979『世界考古学辞典』上・下、平凡社

角田文衛編 1962『世界考古学大系』第9巻（北方ユーラシア・中央アジア）平凡社

中川正人 1991「バジリク王墓日ソ合同発掘調査参加記」『滋賀文化財だより』NO. 162・163、滋賀県文化財保護協会

林 俊雄 2014「中央アジアの王墓」アジア考古学四学会編『アジアの王墓』（『アジア考古学』2）高志書院

北方ユーラシア学会・バジリク王墓発掘日本委員会 1991『バジリク王墓日ソ合同発掘調査実績報告書』

和田晴吾 1991「アルタイの山の中で」『バジリク王墓日ソ合同発掘調査実績報告書』北方ユーラシア学会・バジリク王墓発掘日本委員会

Rudenko.S.I. 1970 “Frozen Tombs of Siberia” University of California Press